

大塚敬節
責任編集
矢数道明

世近
漢方醫學書集成

65
香川修庵 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 65 香川修庵(一) 第Ⅲ期
全40巻

昭和五十七年五月二十三日 発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七一二七四番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



子約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫

凡 例

- 一、本書第六十五卷「香川修庵(-)」には、『一本堂行余医言』巻一―巻六までを収録した。
- 一、本書は全て影印版によつて収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 一 一本堂行余医言 版本 (天明八年版) 二十二卷二十二冊(大塚恭男氏所蔵)
- 一、解説は山田光胤(日本漢方医学研究所常務理事)が執筆した。

香川 修庵

山田 光胤

小 伝

香川修庵先生の略伝を書くにあたって、あらかじめ多くの先人の著書を拝読したが、その出所、出典の不明なものが多く、徒らに孫引きすることは釈然としなかった。そこで、先生の著書に基本をおき、且つ先生の墓に詣でてその墓碑銘を読んで参考にした。

墓碑より

香川修庵の墓は、京都市の西郊嵯峨野・小倉山山麓の二尊院にある。墓を建てたのは息子の希輿で、墓碑銘を撰したのは伊藤長堅である。長堅は、修庵の学問の師、伊藤仁斎の息子（末子）

である。そして、墓が建ったのは、修庵が死去した翌年で、約一年半の後であった。

この墓碑銘によれば、修庵先生は、諱は修徳、字は太沖、姓は香川氏で、号を修庵といった。世々播磨の国姫路町の人で、後に京に居を占めた。祖父の名は某、助九郎と称した。祖母は安積氏の出で、父の名は智吟、小三郎と称した。母は下村氏の出である。先生は生まれながら穎悟（才智すぐれてさとい）人よりすぐれ、はやくから学問がすすんだので、笈を負って京へ出て、学業を我が先人（長堅の父・伊藤仁斎）に受け、仲間から重んじられるようになった（儕輩の推す所となる）。

先年、医術を後藤養庵（良山）に学び、その奥義を極め、学問とふたつながら大成した（教学相長す）。そして、素霊（素問、靈枢）の説を廃して一家の説を立てた。其の意義は、聖道（聖人の道）と医術は、その本（根本）は一であって二でない、（すなわち同一である）というにあった。そこで遂にその堂（教場）を一本堂と名づけた。その医術には誤りがなく、よく病人を判断して治すことは神明の如くであった。医術の弟子として入門したものは総数四百余りにも及んだ。先生は性厳格にして、弟子に教えるために『葉選』を著したが、今も世にひろく用いられている。そのほか、『行余医言』及び文集若干巻が家に所蔵されている。また良山が推奨した温泉浴が、痼疾を愈し、癆疾を起たしめることから、先生は諸国の温泉の機能を試みて判定したが、この業績は非常に精微である。

なお、先生は幼くして父をなくしたが、毎朝起きるとすぐ詞堂（仏間）を掃ききよめて、礼拝する様はちょうど生きている父親につかえるようであった。母親に対しては老年になるまで極めて孝養をつくし、死後は三年の間喪に服した。

妻との間に女兒が生まれ、島田充房に嫁したが先きに死去し、側室は一男一女を生み、息子は希興といい、娘は内海公達に嫁したが先きに死去した。

先生は、天和三年癸亥（一六八三）七月一日の生まれで、宝暦五年乙亥（一七五五）に播州へ行き、京への帰途、丹波、古市村で二月十三日に病死した。享年七十三歳。嵯峨小倉山に葬り、私が其の墓碑を書いた。

銘に曰く。豪傑之才 仁者事業 活人躋壽 立言立法 嘗唯席珍 著書滿笈 不朽者名 赫赫千載

〔宝暦六年歲次丙子（一七五六年）八月 伊藤長堅撰 男 希興建〕とある。

墓碑に享年七十三歳とあるのは、いわゆる数え年で、今様にいえば七十二歳ということである。
著書より

香川修庵の著書に、『一本堂行余医言』がある。その行余医言の自序によると、播州の家にいた幼時、すでに学問の手ほどき、読み書きを受けた。しかし、まだ将来の方針など当然きまっていなかった。十四・五歳頃、朱晦菴（朱子学の祖朱熹の号）の学を聴講したが、それによって得る

処は何もなかった。そこで、十八歳のとき京都に上つて、復古学を唱えていた伊藤仁斎の門に入り、学ぶこと五年、始めて己れの道を見出し、志を立てることができた。自今、自分自身で知り得たこと、聞いて納得したことだけを諸人に教えよう。それには四方に遊学して諸国の知識人と交りを結びたい。しかし、母一人子一人の母親と離れて暮らすことはできない。そこで、諸国遊学の望みを絶つて、熟慮のすえ、医学を修める決心をした。

というのは、聖賢の教えはつまるところ身を修めることが基本であり、身を修めるには無病ということが肝要である。自身が病氣では、忠孝の道もなすことができないし、ましてやその道の人に教えることなどできない。医学を学ぼうと決心した動機を、修庵自身は以上のように簡潔ながら記している。

そして、後藤艮山の弟子になったのであるが、その入門前後の状況を、修庵自身は次のように記している。

乃ち医学を養菴後藤先生に学ぶ。先生初め教えることをがえんぜず（承知しなかった）。そして、こう申された。「恐らく子は、医を為すこと願の如きことを得ざらん（恐らくお前は、医術にたずさわつてみて、こんなはずではなかったと思うだろう）。医者にはなりなざるな」と。しかし自分は、強いて教えを請い、弟子になって、一心に医学を学び三年に及んだ。

修庵が、伊藤仁斎に儒学を学び、後藤艮山に医学を学んだことはまぎれもないことだが、どち

らへ先きに入門したかとなると、自序は、富士川游氏著『日本医学史』の記述と相異する。

また、『日本医学史』には、艮山に入門する際、艮山は修庵をひとめ見てその大器であることを見抜き、医学革新の大任を託したという逸話が載っているが、これも自序と矛盾する。この逸話は、浅田宗伯の著書『皇国名医伝』にある次の部分の引用であろう。

「意を決し医となる。達（後藤艮山）すなわちこれに謂う、二千年来、医説緒を（本来の意義）失い、紛々^{ふんふん}日に甚し（ますます混乱し）、古の道（原点）を今日ふたたび明かならしめんと欲し、力をつくすこと久しくなるも、不可能であつた。我れ老いたり、これこそ、お前が他日なすべき任務である」と（一部筆者意訳）。

ただ、この『皇国名医伝』の記事の、さらにその出所は不明であり、自序から考えれば、艮山をしてかくいわしめたのは、むしろ入門よりのちのことではなからうか。

修庵が、後藤艮山の門に入つて医学を学びおえる迄の軌跡は以上の如くであり、これはとりもなおさず、修庵の思想の一貫性を物語っているように思えてならない。

ふりかえつてみると、十四、五歳で当代学門のオーソドックスである朱子学を学びながら、それに心をうち込めず、復古学を唱える伊藤仁斎を頼つたということに、修庵の体質ともいえる氣質を、わたしはみるのである。聖賢の遺訓は尊重するが、整いすぎる論理の思弁性にはついて行けなかったのであろう。原点に帰り、目で見、耳で聞いたことに真実をみようとした。少年期から

のこの行動が、誰にすすめられたわけでもなく、己れの心のままにしたことだとすれば、もって生れた性格、氣質としかいえないのではないだろうか。

そして、その心の命ずるままに、香川修庵は古医方の中でもまた、独自の立場を形成して行つた。自序はつづく。三年、古今の医籍を殆んど涉獵しつつしたが、ついに心にひびくものがなかった。そこで再度、素問、靈樞、八十一難を、何回となく熟読したが、とうとうこれらの書をなげすめて、「邪説」ときめつけた。そして、「異端邪説で己を修め人を治めて、たとえ岐伯、扁鵲ほどの名医になつたとしても、そんなことは自分の望みではない」とまでいうのである。

「その後、張機の傷寒雜病論をくりかえして熟読すること三、四年に及び、古今の名医で、張機の右に出る者のないこと、それらの薬方の正に信ずべきことに思い至つたが、惜しむらくはその理論は素問より出ていて、陰陽者流が混在し、一二の誤謬妄説もある。まことに千載の一大遺憾である。以後の晋齊隋唐の葛洪、皇甫謐、巢元方、孫思邈、王焘も皆同じであり、宋元以後は論ずるに足らない。要するに古来二千年の間、一人も一書も祖述憲章すべきものを見ず」と。

そこで修庵は、己れ自身の医学の基盤を創始し、それを「一本の宗旨」とよんだ。『一本堂行余医言』は、修庵の医学の集大成であつた。

しかし、修庵にその立場の可否を問われた後藤良山は、こう答えている。「我もまた久しく旧医説を疑っている。しかしながら、これは古今の一大結構で、老人の批判などの及ぶ処ではなく、

結論は未だきめかねている」と。

修庵はそれでも己れの医学を、『行余医言』として結集した。

家族及び後継者

香川修庵の先祖や家系は不明であるが、祖父と父の名は先にあげた通りである。

さて、香川家の墓域はかなり広く、百平方メートル前後ある。そこに十七基の墓石が建っている。「修庵先生香川君碑」とある修庵の碑は大型で、北側の中央に南面して建っている。その左に「貞室孺人下村氏」とある母の墓と、右に「憲室孺人香川氏」とある妻の墓が並んでいる。修庵と南洋（後述）以外の墓はみな同じ小型である。

母 母・貞の没年は、延享丁卯（四年・一七四七）七月八日で、享年八十四歳（数え年）、修庵六十四歳のときであった。墓碑を建て、銘を書いたのは修庵自身である。

これによって、修庵は母が十九歳で生んだ一人子だったことがわかる。碑に「孤子香川修徳謹誌」とある。

妻 妻・憲は姫路の人香川助左衛門（一族か？）の娘で、天性聰慧（さとくかしこい）閑雅（かんが）しずかでしとやかで慈愛深く、妾腹の子も実の子同様に鞠養（きよく）（やしないそだて）した。

また夫と共に、後藤艮山先生にも長年つかえた。したがって、門人達の敬服のまゝであった。

宝暦一年庚辰（一七六〇）二月十六日に病死した。享年七十歳（数え年）修庵の死去の五年後

あつた。

墓碑を建て銘を書いたのは、彼女が育てた側室の子、希輿である。

二代・冬嶺(希輿) 修庵の後継者は、先ずこの希輿であつた。希輿は諱で、字は主馬、号を冬嶺といつた。多才の人で、尾州藩士(武士か藩医か不明)千村潜〇という人の娘をめとつたが、子供ができないうちに、夫婦ともに病氣になり、若くして死んだ。没年は明和五年(二七六八)六月二十五日、享年三十七歳(数え年)であつた。

冬嶺の墓は、西側の北隅に東面して建ち、継母・憲の墓に近い。

三代・南洋(景与) 希輿の死によつて、修庵直系の血統は絶えたが、香川家はその後、養子によつて受け継がれた。香川南洋で、希輿の碑も彼が建てた。

墓碑によると、南洋は諱を景与、字は主善及び孟公といい、南洋は号である。播磨・姫路の生まれで、曾祖父の名は不明だが字は助九郎、曾祖母は安積氏の出、祖父の名も不明だが字は助左衛門、父は名を高貫、字を助三郎といい、母は大橋氏の出である。修庵は景与の従伯父とあり、景輿は修庵の従弟の子であらう。

幼いときから修庵に養育され、成長しては儒医共に業を受けた。傍ら伊藤東涯(仁斎の長子)について儒(学問)を学び、後藤良山について医術を修めた。業成つて、大阪で儒医を開業していたが、修庵は子が少ないので、南洋を養子にしていた。ところが、実子の希輿が若死して子が

なかったため、南洋が京へもどって香川家のあとを継いだ。

南洋は義父・修庵の偉業をよく継ぎ、門人は四百人に及んだ。しかし、著述を好まず、文集若干の著作があるにすぎなかった。けれども、家学をよく教え、よく病人の治療をして、名利を顧みなかった。ので、治療を請う者が多く、痼疾、廃疾をよく治愈せしめた。

正徳四年甲午（一七一四）九月二十日生まれ、安永六年丁酉（一七七七）没。墓碑は、息子の景行が建て、銘は藏人頭右大弁藤原経逸の撰である。

香川家墓域に十七基の墓石があるなかで、修庵と南洋の墓碑が一五〇センチ余りの大きな同型のものである。

四代・容所（景行） 名は景行、求馬と称し、容所と号した。南洋の子で、宝暦三年癸酉（一七五三）十月一日生まれ。成人して妻帯したが子がなく、兄弟もなかった。父の死後その遺業を継ぐと努力したが、安永七年戊戌（一七七八）五月四日病死した。ときに年わずか二十六歳（数え年）だった。そこで、親族が相談して、不破某の子景員に香川家を継がせた。香川の血統の終焉である。碑は景員が建て、銘は師の伊藤善詒が撰した。

五代・申齊（景員） 景員以後は、香川の血筋ではないと思われるが、家系は存続する。

景員は字を惟河といい、右善と称し、申齊と号した。不破清股の子で、明和元年甲申（一七六四）閏十二月八日生まれで、香川景行が死去したあと、旧い門人達が相談して一本堂の後継者とした。



香川修庵墓がある二尊院山門



左から妻・憲室孺人香川氏、修庵先生、
母・貞室孺人下村氏の墓



修庵先生香川君碑

香川修庵書→
冬嶺秀孤松
(矢数道明氏蔵)

※(「香川修庵書」を除いては、
すべて筆者撮影)



才能のある人物だったが、慢性疾患をわずらい、寛政四年壬子（すうせいねし）（二七九二）八月十七日、二十九歳の若さで死去した。

六代・東溪（景寛） 五代景員も子がなかったので、甥の景寛があとを継いだ。諱が景寛、字は栗郷、太仲と称し、東溪と号した。不破潔清の子で、幼くして叔父・香川申斉の養子になった。

景寛は人づきあいもよく、医術も上手だった。子は男女三人あり、男子は文化六年（一八〇九）十一月三日生まれで、諱を景順、字を祐吉、号を半樵または貞斉といったが、文政十一年（一八二八）二月十九日、二十歳（数え年）の若さで親に先だつて死んだ（墓碑は父・景寛が建てた）。そこで、河原能登介実辰の子を養子にした。

景寛は、天明四年甲辰（きようたん）（二七八四）四月六日生まれで、天保八年丁酉（かづとけ）（一八三七）九月二十三日、享年五十四歳（数え年）で病死した。墓碑は嗣子（養子）景福によって建てられた。銘は伊藤弘済の撰書である。

七代以後 六代景寛の墓碑を建てた養子・景福の墓は、ここにはない。恐らく他の墓地に葬られているのであろうが、わたしには詮索する手段がない。しかしその後も香川家は、何代に至るかとはわからないが、長く継承されたと思われる。それはこの墓域に、昭和二十三年に建てられた香川花子さんの墓碑があることからうかがわれるのである。